

ホトトギス

昭和二十三年三月二十八日創刊
昭和三十一年十月十日創刊
平成十八年六月一日発行
第百九十九号

ホトトギス

六月号



俳句随想 〔二百八十八〕

汀子

昨年末から平成十八年の春への推移が、最近の温暖化現象とは考えられない厳しい寒さであった。北国の雪は異常に多く、自然の脅威となって災害が各地で起った。更にホトトギス同人の訃報が次々ホトトギス社に寄せられる。寒暖の差の厳しい中で不順な陽気もたらす健康被害が我々身近に忍び寄ってくることを厳しく受け止めた。天地有情の裏にある通信欄に私へ健康に留意するようにとの一筆を有難くお受けした。お頼まれするとお断り出来ないとは言ってられない昨今の状態である。週に三度、東京往復ということもある。芦屋でしなければ出来ない仕事もある。文章を書くための資料は芦屋に置いてある。「NHK俳句」の原稿と選句。「天地有情」の選句。月が替わると同時にもう月末という私の生活をここで反省しなければならぬ。

ホトトギスは遅刊が取り戻せない時代もあったが、今は順調に発行日が守られている。

最近、俳誌の主宰の事情で廃刊にしたいと私に相談がある。私は「とんでもない。そこで勉強している人達を路頭に迷わす積もりですか」と答える。どんな薄い俳誌でも出版するのは簡単ではない事も知っている。

旬日記 汀子

平成十七年六月四日 苜屋ホトギス会

黒南風 に 六甲嵐 加はりぬ
玉葱を軒端に吊りて留守がちに

六月九日 関西野分会

蛭蝻の必ず通るところかな
なめくぢの行方の失せてゐるところ
あぢさゐの白魁けて活けらるる
六月五日 下萌句会

紫陽花の原種咲かせて客設
久々に揃ふメンバー会涼し
開け放つ涼しさ選ぶ人数に
六月六日 ロイヤル俳壇

蛭蝻に雨の予報の素通りす
夏蒲団さへも足蹴にしたること
稿債の三分の一果たす汗
蛭蝻の所在は雨の銀の道
この庭の花桶の香に逢ひぬ
六月八日 悼 山田桂梧様

あふれく日々震災十年偲ぶ夏
耐へし日々震災十年偲ぶ夏
六月九日 清交社

黒南風の先がこぼしてゆきし雨
計画は早目々々にして涼し
六月十日 工業倶楽部

燕の子親の視界の中にをり

紅白の紛れて梅の実の揃ふ
その香いま雨に鎮もる椎の花
六月十一日 北近畿ホトギス俳句大会前日句会

夏炬燵きいぶせき苦屋かと思ふ
万緑を抜け来て町を迷ひけり
今宵泊つホテルはいづこ梅雨霧に
梅雨雲の変幻に道迷ひしや
六月十二日 北近畿ホトギス俳句大会

丹波路の旅は二日目朝曇
帰路はもう迷ふことなき五月晴
六月十四日 大阪倶楽部

夏服の汚れしほどの旅疲れ
よく見れば草取せねばならぬかな
雑草を引くに適ひし雨上り
南に香をひそめてをしり椎の花
六月十四日 綿業倶楽部

紫陽花の穂のさへぎる順路あり
雨蛙鳴く里山の旅の宿
朝の間の四葩の勢ひつづきけり
紫陽花に道を迷ひしやうなもの
六月十五日 夏潮句会

庭師にも見落しのあり蜘蛛の糸
人悼む心に黙す五月闇
芦屋いま梅雨晴と告げ受話器置く
梅雨止めばレインコートの忘れもの
対談の済みて百合の香残りけり
六月十八日 句会と講演の会

萍の余白に雨の水輪かな
どの梅の実ともわが家の庭のもの
梅雨晴を信じて予定組み上る

六月十九日 野分会

釣堀の動かぬ刻のありにけり
なめくぢや晴のち曇夜は雨
雨降りて止みて蛭蝻世界かな
六月十九日 悼 阿部御祖母様

百歳の天寿といへど明易し
六月二十一日 有恒倶楽部

足許を見て仰ぎ見てえごの花
骨ごとを食べて小鮎でありしかな
蚊遣火を庭に配りて客設
佇めばこぼれ止まざるえごの花
遠き旅終へ近き旅明易し
一枚の絵の涼しさに佇みぬ
邂逅は涼しき絵にもありにけり
六月二十一日 無名会

雨のなき旬日梅雨でありにけり
十葉の花に重たき白なりし
明易き朝を待みて稿を置く
梅雨に処すため旅靴ありにけり
稿債のはかどることも梅雨籠
六月二十三日 きんぎょ句会

夏至の朝これより旅の多き日々
すぐ止んで晴れて旅路は梅雨のもの
大蜘蛛の動かぬ如く失せにけり
蜘蛛を見て蜘蛛に見られて稿を置く
六月二十四日 時雨句会

齧齧ありしことも涼しく解決す
骨ごとといへど骨なき如く鮎
掛かるとも思へぬ一人鮎の棹
はづしたる襖の見ゆる置きどころ

廣太郎句帳

廣太郎

六月九日 土筆会

梅天にビルは虚しく峙てり
放流をしてより築の動き出す
子等の声籜を歪めてをりにけり
梅雨空に日本列島固まれり
梅雨雲を弾く日差でありにけり

六月十一日 上崎暮潮氏句碑除幕記念会

平成十七年六月二日 蕉心会
水尾長く長く船行く夏の川
川風を聞き一杯の麦茶かな
黒南風となる川風の行方かな
模型屋の昼を灯して五月闇
ついで前膝が笑つてをりにけり

これよりは句碑守として山法師
梅天を押し上げてみる除幕かな
青石といふ涼しさに彫られたる

六月十二日 「祖谷」七百号記念会

迷走す三角池のボートかな
タイガース首位転落についりかな
六月四日 伝統俳句協会関東支部大会
富士に向け万緑色を整へり
万物を統べたる富士の雪解かな

祝ぎ色といふ万緑でありにけり
祝ぎ心藍の茂にをさめけり
香水といふ一滴の祝ぎ心
五月晴阿波の日差でありにけり

六月十三日 朝日カルチャー若草句会

夏服は黒で八頭身美人
日差きて富士の雪解を急かしたる
六月六日 はせを句会
五月闇灯せば句座の新しく
君が居てこそその涼しさありにけり
雲の峰富士と拮抗してをりぬ

夏蒲団てふ剥ぐためのものであり
目が覚めて何処へ行つたか夏蒲団
夏蒲団掛けて落着く子の寝息
杜若咲かせて女系家族かな
肌触り確かめて買ふ夏蒲団

六月十六日 登高会

夜を統べて蝙蝠夜を使ひ切り

猫が居て子がゐて網戸裏表
蝙蝠の闇といふ闇知り尽くし
竹落葉風が奏でる嵩であり
六月十八日 ホトトギス社句会

六月二十一日 草木瓜会合同句会

夏帽子世間を少し遠ざけて
里山を丸くをさめて青嵐
バナマ帽あの時国は強かつた
六月二十二日 目黒学園句会

守宮這ふ好みの窓のあるらしく
壁動く如くに守宮這ひ出せり
六月二十六日 伝統俳句協会通常総会
句やかに受賞者揃ふ夏館
六月二十八日 若水会

二次元を使ひ切つたるあめんぼう
水輪てふ怒濤に乗りて水馬
君が来てよりアイリスの香となれり
六月二十九日 三番町句会
天井といふ極楽に守宮這ふ
虚子館の玻璃の歪みやゆすらうめ

雑詠

廣太郎 選

今散りし蓮の台の金色に 鹿兒島 青野沙人
 君一步 吾一步 春深みかな 同
 原点といふ枯菊の枯れやうに 同
 受験子に試練のやうな空模様 龍ヶ崎 今橋眞理子
 大試験父は寡黙に見送りぬ 同
 大試験母あれこれと忙しなし 同
 藪柑子したしむ日々や山居して たつの 浅井青陽子
 北塞ぎ山居いよ く 大寒に 同
 室の津の丘の社に初詣 同
 先づこれやこのを覚えし子の歌留多 長岡 安原 葉
 降る雪にはしやぎて怖さまだ知らず 同
 旅帰るよりあたふたと卸す雪 同
 住み古りて相知りわれと初鴉 東村山 村松紅花
 世を捨てて世に捨てられて枯芦に 同
 住みなせりめぐらす氷柱垣として 同
 纏ふより背に負ふ寒さなりしかな 香川 湯川 雅
 マスクして視野の欠けたる思ひかな 同
 冬晴やどれほどもなき悩み抱き 同

国栖奏や邨に犬ぬ誇り持ち 樞原 稲岡 長
 残る雪こは日裏と思ひ見る 同
 きしきしと何積む音か霜夜なる 同
 大氷柱巖の匂ひに垂れにけり 東京 坊城俊樹
 玻璃の夜のしづかや春炬しづかなる 同
 北窓を開く四角の朝開く 同
 銀座歩す人に高しや寒の月 熱海 嶋田一步
 地下鉄を出て来し吾に月冴ゆる 同
 東京十九番ホーム月冴ゆる 同
 長椅子が昼間のベット春の風邪 同
 冬夕焼鷗翔び増ゆ寝に去るか 同
 先づ白が在りて冬富士ありにけり 同
 後園の池畔雪吊要とし 福岡 松尾緑富
 後園の手入れ落葉を掃きしあと 同
 後園の寒禽しきりなる木の間 同
 星ならぬ雪見となりし旅仲間 神戸 千原叡子
 マスクして鳥天狗のやうな人 同
 薄氷に閉ざされて泡扁平に 同
 一握の芒ほむらに巻かれけり 同
 恒例の庭焚火より年果つる 姫路 桑田青虎
 酒蔵の軒をねぐらの寒雀 同
 雪女休みし雪のベンチあり 福山 竹下陶子
 しんと降りこんこんと雪降れる 同
 初日出づ刻々のとき刻々と 同

雑詠句評（五月号より）

明倫・静龍・中正

葉・芳子・憲明

美奇・千鶴子・保佳

むつみ・廣太郎

焼藪に俳論矛を納めけり 神戸 山田弘子

「焼藪」焼いた薩摩芋（季冬）と広辞苑にある。ことに季節は冬と謂っているのが嬉しい。風びゅうびゅうの寒い時に食べてお腹をあたためるイメージが湧く。抒情詩人と思っていた山田弘子さんが理論より生きる根源は目の前の食だと詠われた。それもかなりのアイロニーが含まれてである。土の香の強い歌人伊藤左千夫、長塚節の作品を繰ってみたが、病や恋情には執着して作歌しているが、食の旺盛さの作はない。

ホトトギス誌上でも仲々食の句は登場して来ない。それも普段食生活の句があつたら愉しいと思う。食足りて亦亦理論の矛を立

てることもいいと私は考える。（明倫）

激しく俳論を戦わせていた時、ふと外から「イーシャーキイ モーヤキタテ」という声が聞こえてきた。早速買い、暫し仄々とした休戦が行われる。筆者ならばある液体を考えたが、いや、それでは余計に俳論は激しくなるだろう。「焼藪」ならではのほくほくした雰囲気が伝わってくる。（廣太郎）

会へばすぐ雪はいかがと又問はれ 長岡 安原 葉

雪国の生活に慣れた作者が在所を離れた場所では出会う人たちが、何かにつけ雪の深さを問われるのである。今シーズンには十二月に入るといつもの年よりも早くから積雪があり日本海側だけでなく太平洋側にもかなりの積雪が幾度となく降った。何時もの年だと雪にも会うことの無い街住の人々に積雪を体験させ雪に関心が深くなっている。作者の住んでいるところは豪雪地帯にあり積雪量も多い土地柄である。旅先で親しく出会う入々が雪見舞いを兼ねて雪の深さを問うてくるのである。「又問はれ」と表現して作者が雪国の暮しぶりをさり気なく何回となく語っている様子が推測されるのである。（静龍）

先年の大震災、去年からの冬は近来稀にみる大雪にみまわれた新潟に作者がお住まいであらせられる事は多くのホトトギス誌友の知るところである。句会などで作者に会う人は必ず「地震大変でしたね」「大雪は如何ですか」という挨拶から始まる。その言葉に対して心より感謝している作者である。（廣太郎）（以下略）

天地有情

八子選

大寒の灯と火に抱かれぬるピエタ
 ひたすらに塔は傾き春の雨
 大いなる初日大瀬戸真くれなぬ
 寒満月海ひたひたと波を織る
 寒き世に明治の名残誇りとし
 瞑目をするここと多し冬の暮
 臘梅やこれより先は別世界
 残雪を嗅ぎつつ犬の通り行く
 枯木とは心の通ひ合ふ日あり
 目を背けたきもの地震絵双六
 朝影に浮木と鴨の小勢の陣
 轡虫鳴き止み宿舎誰か来る
 炭をつぐ手を匂やかに返しけり
 冬の星赤きは君の為に燃ゆ
 怖れつつ雪の郷愁断ち切れず
 雪雲の変幻に星あきらめず
 円月橋寒月かゝる頃いかに
 後園の薄氷解けぬままに暮れ

八尾 岩垣子鹿
 同
 大三島 池田都々女
 同
 豊中 瀧 青佳
 同
 明石 中杉隆世
 同
 神戸 後藤比奈夫
 同
 榎原 稲岡 長
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 金沢 藤浦昭代
 同
 福岡 松尾緑富
 同

己が影踏みゆくばかり去年今年
 今年何をなすべき初御空真青
 あひみてのちのころに取る歌留多
 思ふ人あり一輪の寒椿
 大琵琶の礫の如く鴨浮寝
 見ゆる限り雪吊の景なりしかな
 無事帰り着かねばならぬ雪の嵩
 火の国の佳人悼むも松の内
 猫柳揺れて光の綺羅となる
 雪搔の馴れたる腕も追ひつかず
 凍ゆるむ生活の自信一步づつ
 春隣小さき旅より無事帰宅
 旅支度整へてより卸す雪
 豪雪の消息を聞く避寒宿
 家持の万葉の歌書初に
 白梅と書き紅梅と筆太に
 燠といふ焚火のつひの吐息かな
 早春の光は粗し影もまた

熊本 岩岡中正
 同
 東京 今井千鶴子
 同
 同
 姫路 桑田青虎
 同
 神戸 山田弘子
 同
 東大阪 東野一彌
 同
 同 東野太美子
 同
 長岡 安原 葉
 同
 たつの 浅井青陽子
 同
 神戸 長山あや
 同

天地有情句評

汀子

臘梅やこれより先は別世界 明石 中杉隆世

臘梅の香りに包まれた別世界踏み入る詩人としての感性

枯木とは心の通ひ合ふ日あり 神戸 後藤比奈夫

枯木と心を通わず作者の詩情。

轡虫鳴き止み宿舍誰か来る 樞原 稲岡 長

轡虫の喧しい音色が止んだ瞬間の判断。

炭をつぐ手を匂やかに返しけり 東京 稲畑廣太郎

昔の佳き時代の雰囲気を見ている作者の心。

怖れつつ雪の郷愁断ち切れず 金沢 藤浦昭代

雪という美しいものとそれによる災害を思い揺れる心。

大寒の灯と火に抱かれぬるピエタ 八尾 岩垣子鹿

キリストの亡骸を抱くマリアの像のピエタを包む寒燈。

寒満月海ひたひたと波を織る 大三島 池田都々女

寒の冷たい夜空の月が零す光を織る海の波を捉えて妙。

寒き世に明治の名残誇りとし 豊中 瀧 青佳

明治の気骨を誇りとしている作者の見る寒き世。